

## 第 31 回「今後の松崎町のあるべき姿」

コロナショックを機会に、今後の「松崎町のあるべき姿」を考えたい。同時にそれは、松崎版、真の地方創生である。

昭和 36 年、伊豆急行が下田に開通し、都会からドッと観光客が押し寄せてきた。一大観光ブームの幕開けであった。旅館・ホテル・民宿が次々と建てられた。まさに観光は総合産業であり、建築、商業など全ての業界は潤った。高度経済成長、「明日は、常に明るい」という時代を経て、バブル崩壊以降失われた 10 年、20 年と言われた。旅行形態がガラリと変わり、日本全国が観光地となり、競争が激化し、伊豆への観光客は減少をたどった。お客さまの本音は、伊豆で景色が良く温泉があれば、どこでも良かったのかもしれない。伊豆南部の観光は、伊豆急開通から起算すると、失われた 60 年だと思う。何が失われたのかというと、「助け合い」、「優しい心」ではないか。貧富の差が少なく等しく貧しかった時代は、地域でお互いさまと言って助け合った。ぜいたくはできなかったが、心は豊かで笑いがあった。しかし、観光ブームで競争が始まり、効率を求め、「助け合い」は薄れた。リーマンショック、東日本大震災後、伊豆は直接的な被害はなかったが、客足は戻ってこなかった。国・県も観光対策として、各種キャンペーンを打ったが、効果は一時的であった。

私は今回のコロナショックを受け、松崎町は日本の経済動向に左右されにくい体質にしなければいけないと痛感した。コンサルタントなど、いろいろな人の意見も参考にしながらも、やはり地域のことは、自分たちで考え抜いたまちづくりでなければ本当ではないと思う。イノベーション（技術革新）の本来の意味は、「新結合」である。すなわち、過去の素材を活かし、新しい手法を加えることである。松崎町にはたくさんの素材があり、大事なことは、その「素材を活かす」こと。コロナ後、全国の市町は一斉に、金太郎飴のように同じことを繰り返すだろう。松崎町は、それと一線を画したい。

観光は人づくり、地域づくりであり、松崎町に観光は欠かせない。持続的かつなだらかな成長のためには、ものづくりである農業、林業、水産業と観光業が一体となった「自給自足」、「地域内経済循環」体制を確立させ、徹底推進することが、遠回りに見えても、人口減少時代に生き残る方策だと思う。従って、三聖苑に「直売所」は、地域内経済循環、観光客との交流の見地からも絶対必要なので

ある。

#### ■「農作物」

桜葉、自然薯、わさびみそ、おやき、パパイヤ、わさび、栄久ぼんかんなど、浜松の大規模農業と競合しない狭域多品種農業。土づくりからの農業。

#### ■「林業」

21世紀の森復活、ストレス社会で疲れた都会人が、森の精気を吸収し癒やされ都会に戻る。ヨガ・気功・民宿提携。

#### ■「漁業」

定置網復活、カサゴ・ハタを松崎ブランド魚にする。漁師後継者育成、都市料理店との直接取引ルート開発。

#### ■「体験など」

昆虫、ホタルの里づくり、日本一のなまこ壁、着物の似合う町、長九郎・三浦ウォーキングロード整備、二地域居住推進、ふれあいと一ふや。を活用したIT・テレワーク推進。

#### ■「宿泊・飲食業」

地元食材を生かした郷土料理、和洋折衷料理の提供。

これらの素材を横断的に集約し実行していく、「経済戦略会議」を設置し、実戦部隊の中核とする。

私が以前から考えていたことは、旧岩科小学校跡地に、サポート付き高齢者住宅をつくる。入居条件は、元気で身の回りの清潔を保ち、年金で生活できる方。入居保証金が必要。食事はバイキング方式で、食材は直売所から仕入れ、全員が交代で料理を作る。桜葉などで小遣いを稼ぎ、近くの幼稚園児と触れ合いリフレッシュし、病気になったら岩科診療所に。

お年寄りに優しい町は、子どもにとっても、観光客にとっても必ず受け入れられる。ホタルが舞い、歴史・文化の豊かな優しい町に、人は多く訪れるであろう。